第４８回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～ 」開催

１１月９日（土）第４８回「はちしん灌花塾」が本部２階会議室において開催されました。

地域史家高橋教雄先生をお招きして「江戸時代の郡上街道をめぐる参詣道から『白山信仰の拡大Ⅱ』」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方計２７名が受講しました。

＜白山３馬場と禅定道＞

７世紀から８世紀にかけ朝鮮からの渡来人にとって、白山は日本海航路の目印であり航海を守護する霊山であった。

渡来人は北陸に定住し、渡来人の信じる十一面観音信仰は白山信仰として北陸一帯に広がり、９世紀になると３馬場（加賀、越前、美濃）が開かれた。

３馬場からの白山登拝ルートは禅定道と呼ばれ、最初に越前馬場から九頭竜川を遡行するルートが開かれ、その後別山を中心とした美濃馬場が開かれた。

９世紀から１０世紀にかけ美濃馬場は檜峠から石徹白を経由するルートと、大日岳を経由するルートが開かれた。

中世（鎌倉～室町）の禅定道は、修行僧たちの修験の場であった。

＜江戸期美濃側の白山登頂記録＞

江戸期（１９世紀）になると庶民の白山参詣が始まった。登頂記録は以下の３つ。

①『白山参り』悲願寺１２世旭照山元隆（きょくしょうさんもとたか）の１８０７年７月から８日間の紀行文
②『三ツ山巡り』春日井市水野在住の尾張藩士の１８２３年６月から３５日間の三山巡り（白山・立山・富士山）紀行文
③『三山道中記』大府市向山の平七一行１３人組の１８２３年６月から５１日間の三山巡り覚え書き

＜白山信仰の参詣道としての郡上街道＞

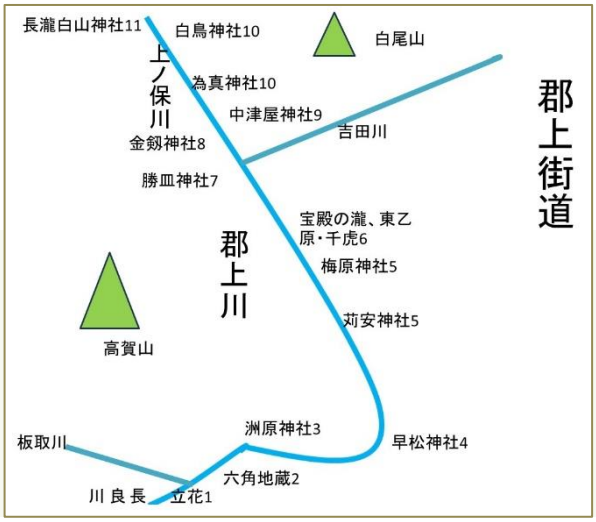
江戸時代、郡上街道は白山神社を巡行する白山信仰の道であった。

１．　立花は郡上街道の入口

- 立花の渡しがあり、渡し賃は１人３文、馬８文、洲原神社参詣１人１２文
- 立花神社は泰澄創建伝承を持つ白山神社。金剛童子を祀り洲原神社の前宮とされる。
- 立花鹿苑寺盧山観音（ろくおんじろざん）、佐ヶ坂薬師堂があった。

2.　六角堂地蔵は街道の要所で実質的に郡上の入口

六角堂は飛騨大工宗康（むねやす）の建立と伝わる国重要文化財



3.　洲原神社

洲原神社は７２１年泰澄創建伝承を持つ。平安末から鎌倉時代に諸家の崇敬を得、江戸期には農耕神として尾張三河で洲原講が組まれた。

4.　早松沙羅（はやまつさら）神社

上河和集落にあり泰澄創建伝承を持つ。神仏分離令により十一面観音像が霊泉寺（れいせんじ）に移される。

5.　下田の渡し

下田の渡しがあり、下田若宮八幡神社は泰澄創建伝承を持つ。洲原神社創建に関わった西神頭安定（にしごとうやすさだ）氏が在住。

- 渡し賃１人４文、牛馬８文、１日７０人程度利用。白山参詣者は１人１２文で大屋船番所があった。
- 苅安白山神社は泰澄創建伝承を持つ。別当寺真福寺（べつとうじしんぷくじ）があり、宿泊地で宿賃は１人１２４文。
- 羽佐古（はざこ）番所、梅原白山神社、白谷口（しろたにぐち）番所があった。

6.　東乙原から八幡へ

- 東乙原白山神社は泰澄創建伝承を持つ。
- 法伝の瀧があり、参詣に関連する「車返し」の地名が残る。円空が修行場として不動明王像を奉納。
- 千虎白山神社は泰澄創建伝承を持つ。箱坂越えを過ぎた穀見稲荷神社は「中野明神」と称し泰澄創建伝承を持つ。

7.　八幡城下から越前街道となり上ノ保筋と呼ばれる

- 勝皿白山神社は「元佐良（もとさら）」と称し泰澄創建伝承を持つ。五町の吾竹院（ごちくいん）は永平寺末の心月寺の末寺。楊柳寺（ようりゅうじ）（曹洞宗）観音堂は「懸崖（けんがい）つくり」で修験寺の末裔。

８．　金釼神社

- 口神路白山神社は泰澄創建伝承を持つ。徳永地蔵で三叉路になり「くるす道」と「上之ノ保筋」に分かれる。
- 金釼神社は「倶利伽羅不動金釼大権現（くりからふどうこんけんだいごんげん）」と呼ばれ、加賀仏原（ほとけはら）鶴来から勧請された。遠藤常友が社殿を再興した。

９．　中津屋白山神社

- 中津屋白山神社は泰澄創建伝承を持つ。併設された十禅寺（じゅうぜんじ）の本尊は十一面観音。講堂洞に屋敷跡。
- 大島稲荷神社は泰澄創建伝承を持つ。弘仁年間に稲荷神社を勧請。

１０．為真から白鳥へ

- 為真白山神社は泰澄創建伝承を持つ。貞享年間に社殿が建立され「してかけ（注連懸）の宮」と呼ばれる。
- 白鳥神社は“養老６年に白鳥のお告げにより、この地を霊地として建立した”との伝承を持つ。宿泊地で宿賃は１人１３２文。

１１．長滝白山神社と長瀧寺

長瀧寺の開帳料は１００文。初穂料は１人２０文。宿泊は１人１００文。昼飯代は１人５０文。

＜白山信仰拡大の要因＞

美濃馬場が栄えたのは、 北陸から東海地方へ信仰圏を拡大したことによる。各地に白山神社が建立され、白山信仰は地域の宗教的要請（死者の穢れを排除しない）に応える布教形態に変容した。

①石徹白御師が越前から美濃へ転回し、東海地方へ信仰圏を拡大。
②里修験の成立。郡上では牛道の白尾山、美並の高賀山などで成立。
③長瀧寺先達の活躍により参詣者の拡大。

＜石徹白の美濃への転換＞

石徹白は中世後半、越前から東海地方を経済圏とする信仰圏へ転換し、長瀧寺とは別に別山を核とした社人組織を形成した。石徹白は御師の活動により独自の信仰形態を構築。

＜長瀧寺先達の白山参詣の実態＞

長瀧寺の先達山伏は白山参詣者の案内人でもあり、長瀧寺『荘厳講執事帳（そうごんこうしつじちょう）』による参詣者数は、１６８０年に三州・尾州より１２０～１３０人、遠州より１５０人余などひと夏で３５０人余であった。

『白山参詣之帳』による参詣者数は、１７０４年から１７４６年の４２年間に１，３２３人であった。

＜白山信仰の実態の変化・近世地方霊山の里修験の成立＞

山岳信仰は中世になると里山修験が成立し、地方の白山を望む低山に白山社と寺坊が建立され信仰圏は平野部に拡大した。

こうした低山は小白山（地方霊山）として周辺地域の信仰の拠点となり、修験僧たちは泰澄創建の縁起由緒を共有し、泰澄の権威を唱導することで里修験場の正当性を確立した。

＜里修験の役割＞

里修験者たちは農業などを営みながら修験僧として活動し、近世になると山麓寺社は天台宗の末寺を名乗り、里を経済基盤と考え、里に根付くため、古来山岳信仰が踏み込まなかった民衆の祈祷・葬儀・先祖追善供養など宗教的要請に応えた。

＜まとめ＞

最後に先生は、「白山信仰は祖霊信仰（霊は霊山に登り、神となり里に降り恩恵をもたらす）と本地垂迹（神は仏の化身として現れる）が融合して成立した。江戸期になると里修験の成立により平野部に進出すると同時に、在地民衆の宗教的要請に応える形態に変容していくことで宗教圏を拡大した。

郡上街道沿いには多くの白山神社が建造され江戸期には多くの参詣者が白山に詣でた。今でも白山神社に残る本尊や形態、地域に伝わる祭りなどから白山信仰の持つ文化の痕跡を見ることができる。」と締めくくられました。